2016年7月17日

全国病児保育研究大会 in 新潟

子どもの事故予防

子どもにケガは大切！　でも、命はしっかり守る！

掛札逸美（博士・社会/健康心理学）
NPO法人 保育の安全研究・教育センター
http://daycaresafety.org/
http://itsumikakefuda.com/

深刻な結果の予防に携わる一人として

- 人間（子ども）が死ぬような事態は、できる限り防ぐ
  （「絶対に防ぐ」とは言えません。…最後の話題に続く）

- 保育現場で、職員や保護者が気にするのは…、子どものケガ（外傷）！　＝ 多発する、外から見える

★外傷によって子どもが亡くなることは、まずない
（保育・教育の場の例外：高所からの転落）

- 一方、深刻な結果につながるできごとは、予防がなされず、繰り返し起こる　＝ めったに起きない。「うちの子は大丈夫」（楽観バイアス）

深刻な結果の予防 ≠ ~~事故予防~~

- 「事故予防」「ケガ予防」ではなく、「深刻な傷害の予防」（WHO）
  ★交通の安全を例にとると…
  – 事故予防 ： 標識、横断歩道、信号、ルール、後部確認センサー等
  – 深刻な結果の予防 ：エアバッグ、シートベルト、チャイルドシート等
- 特に、子どもの「事故」を予防することは、非常に難しい
  – すべてが興味をそそるもの → **子どもに「誤使用」はない**
  – 子どもの判断力、注意力、予測能力などは、すべて未成熟
  – 子どもは、環境探索や他人とのかかわりの間で育っていく
- 「事故が起こるのは当然」と考え、事故の結果としてのケガや発症が深刻にならない対策を立てる
- 「深刻な結果を減らすこと」をターゲットにする明確化が必要

子ども（特に未就学児）が自分では命を守れない危険

- すり傷、切り傷（ケガ）は、命にはまずかかわらない

● 命にかかわる深刻なできごとだが、見逃されがち
  – **睡眠中**（特に0～1歳児）：うつぶせ寝、口の中、ベッドまわり
  – **誤嚥窒息**（玩具、食べ物、飾り、磁石類）
  – **磁石やボタン電池の誤飲**
  – 酒類や薬、灰皿の水、洗剤など**毒物の誤飲**
  – **水**（浴槽、プール、河川・海など）
  – **高所からの転落**（ベランダ、遊具、階段）　★これだけはケガ
  – 道への飛び出し、車の前後への**走り出し**
  – **やけど**
  – **食物アレルギー**

サイトに予防情報あり

人間は、見守れない生き物

- 特に、スマートフォン類が蔓延する今の時代…
  - スマートフォンやパソコンは、認知の容量を大幅に奪う
  - 子どもと関わる時は、機器を必ずしまう
- 子ども（2～5歳）が覚醒している時間のうち、1日平均30分はまったく見守られていない。また、「母親の視界に入っている」時間のうち3割は、母親は子どもとは違うことをしている。（カナダ）
  （Morrongiello, Corbett, et al., 2005）
- 家庭内では、場所（浴室、キッチン、リビング、子ども部屋等）ごとに、それぞれ安全な環境づくりと保護者の関わりが重要。幼児に「安全」を教えても傷害の減少にはつながらない
  （Morrongiello, Ondejko, et al., 2004）

「ひどい事故なんて、うちの子には起きない」

- **楽観バイアス**：「悪いことは、自分（の側）には起こらない」（＝「良いことは、自分（の側）に起こる」
  → 前頭葉の下前頭回に、これを司る場所がある
  （Weinstein, 1980; Sharot, et al., 2012）
- **偽りの安心感**（immunity falacy）：「チャイルドシートを使わなくても、これまで私たちに事故は起きていない」→「使わなくても大丈夫」（Will, 2006）
  - チャイルドシートは事故予防のためではなく、「万が一、事故が起きた時の傷害軽減のため」（因果関係の誤った推論）
  - 確率的に支配されている事象（事故）が「起きない」ことを、自分自身の努力の結果であるかのように錯覚する認知バイアス

「その親が見てなかったからでしょ」「うちは大丈夫！」

- 人間はとにかく、**「楽観バイアス」を強化したい**生き物
  「あの親が悪かったから」「あの子が悪い」「不運だった」…
  （被害者を責めるvictim blaming や 因果の誤りfundamental attribution errorという現象） →「自分（の子ども）は大丈夫」
- 「注意する」「気をつける」に実効性はほぼないが、「ぼんやり見ているだけ」でも、**深刻な事故が起こる確率は低い**（日本では）
  →「これでいいんだ」「自分の子どもは大丈夫」（偽りの安心感）
- 日本の文化は、「その場にいた誰が悪かったか**（責任追及）**」にばかり意識を向け、「では、どうしたら次の類似事例を予防できるか**（原因追究と予防）**」を考えない傾向が強い

万が一の深刻な事故が起きてからでは遅い

- 見えないところにかたづける（「手は届かないだろう」は危険。子どもは断固、取りに行く）
- 子どもに真似をしてほしくない行動は、できる限り、目の前でしない。子どもはおとなの一挙一動を見ている、真似をする
- 子どもと手をつなぐ。つなげないのであれば、リードを使う（子どもは走り出す。子どもは車から見えない）
- 車に乗せる時は一番最初。車から降ろす時は一番最後。または、先に降りたおとなが必ず手をつなぐ
- 風呂場には鍵。または、水・湯を抜く（約2歳までは）

★ 小児の救急救命法を身につけてください
（心肺蘇生法、気道内異物除去）

サイトに予防情報あり

子どもの頃を思い出してみてください

こんな崖を、あなたは最初から
ひょいひょいと登れましたか？

写真は、名古屋教育文化センターのウェブサイトからお借りしました。
http://boken.co.jp/youji/news/?p=13250

登り棒、最初の時に、スルスルと登れましたか？

写真は、中村製作所のウェブサイトからお借りしました。
http://www.nakamura-mfg.com/

訂正：子どもは失敗から学びません。なぜなら、子どもは失敗をしないからです。子どもが何度も試し、挑戦する姿を「失敗」と決めてしまうのは周囲のおとな。よって、このタイトルは、「子どもは痛みから学び、おとなは失敗から学ぶ」でしょうか。（2016年1010日）

子ども（人間）は、失敗と痛みから学ぶ生き物

からだで覚えていくことは…（実は勉強も同じですが）

- 初めから、なんの失敗もなく、うまくでき続けていたら？
  「自分がどのようにできているのか」すらわからない
- 外界との関わりは、からだで覚えること（頭でわかってもダメ）
  「これは痛いからやめよう」
  「こんなケガ、大丈夫だよ！」
  } 「痛み」は、生き物にとって重要なシグナル
- 人との関わりも「痛み」から覚えること
  とっくみあいのケンカも、友だち関係のこじれも
  ★ **からだの痛みと脳の痛み**は、脳にとっては（ほぼ）同じ　←脳ではなく、心
- 小さい時にこそ、「小さな痛み＝学び」をたくさん！

「リスク」とは…

必ずしも悪いことではない

- 「リスク」とは、価値が失われる可能性（確率）
  （例：保育における価値＝子ども、働く人、信頼、モノ、情報、保育活動、保護者が働ける、などなど）
- 「リスク・ゼロ」は、人間の生活の中ではありえない
  人間はミスをする生き物
  注意を向け続けることができない生き物
  注意散漫で、すぐ上の空になる脳をもった生き物

★ リスク・マネジメント　≠　リスク・コントロール
（子育て、保育・教育の大部分は、リスク・マネジメント）

子育てや保育における「リスク」の扱いは2つ

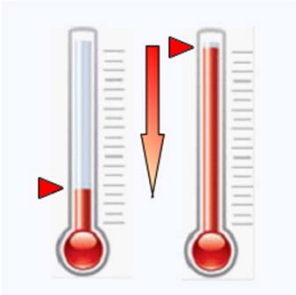
価値とリスクは、常に天秤の上
＝ 子育て、保育はほぼこちら

ケガやケンカ等　＝　育ちと学び

価値を理解し、リスクと天秤にかける
（広義のリスク・マネジメント）

価値が（ほぼ）存在しないリスクは、ゼロに近づける努力

感染症の流行、死亡・深刻事故



リスクを理解し、予防する
（危機管理）

米国の公園遊具の安全は行き過ぎた（と反省）

ケガをするようなすべてのリスクから、子どもを守らなければならない、これはおとなに共通する誤った認識である。現実の世界は、リスクにあふれている、金銭的、身体的、感情的、社会的リスク…。理にかなったリスクは、子どもの健康な成長のために不可欠である。リスクの扱い方を学ぶことは、子どもの認知・身体発達にとって不可欠であり、（その経験を通じて）チャレンジに満ちた環境から（子どもは）自分を守れるようになっていく。子どもがリスクを扱えるように支援していくことは、おとながすべき重要な行動であり、それによって子どもは自分自身と、自分の行動の結果に責任をとれるようになっていく。

“The Dissolution of Children’s Outdoor Play: Causes and Consequences”, Joe L. Frost, Ph.D. (2006)

70年代以降、米国の公園遊具の安全に力を尽くしたフロスト博士（テキサス大学名誉教授）、2006年

英国の取り組み

- 子どもたちが、自分たちで勝手に遊べる場所をつくる
- 遊び場を開放する前に、徹底した「リスクー便益分析」を行い、益がリスクを上回るのであれば、益をとる
- 専門のトレーニングを受けたおとなが常駐するが、子どもとはまずめったに関わらない

「守られすぎの子ども」、『アトランティック』誌、2014年4月号

英国の取り組み

- 子どもたちが、自分たちで勝手に遊べる場所をつくる
- 遊び場を開放する前に、徹底した「リスクー便益分析」を行い、益がリスクを上回るのであれば、益をとる
- 専門のトレーニングを受けたおとなが常駐するが、子どもとはまずめったに関わらない

"The Overprotected Kid", Hanna Rosin, The Atlantic, April, 2014　で検索

最後に…（個人的な話も入れて）

- 子どもが、遊びから学ぶ生き物である以上
  （できるようになっていく。急に「完璧にできる」わけではない）
- 子どもの身体能力や判断力、リスク認知が未熟である以上
- 人間が、死ぬ生き物である以上
- そして、事故、および事故による深刻な結果が確率的に起こる（「運に左右される」）以上

★不可避に起こる死はある
死を責めず、死を受け入れ、そこから予防を学び、
予防できる深刻な結果はできる限り、減らしていく